

岩 崎 横 穴 墓

七瀬川河川改修工事に
伴う発掘調査報告書

1996・3
大分県教育委員会

序 文

本書は、平成7年度に大分県教育委員会が実施した岩崎横穴墓の調査報告書であります。調査は大分市の南を流れる七瀬川の河川改修事業に伴うものです。七瀬川は大きな蛇行を繰り返しながら口戸から植田方面に流れており、その流域は肥沃な水田地帯となっています。古来、人跡の絶えることがない場所であり、多くの史跡が知られています。岩崎横穴墓もこうした古代遺跡の一つとして、周知されていたものです。横穴墓の近くには、鎌倉～室町時代の口戸磨崖仏もあり、中世植田荘の中心部として栄えていた地域と考えられております。

本書がこうした郷土の歴史と文化を理解するための一助になれば幸いです。

なお、調査にあたり多くの方々のご指導と協力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成8年3月31日

大分県教育委員会

教育長 田 中 恒 治

例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が平成7年度に発掘調査した大分県大分市大字口戸字岩崎所在の岩崎横穴墓の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省地方建設局大分工事事務所の委託をうけ、大分県教育委員会が実施した。
- 3 遺構の実測、製図は高橋徹、渡辺桂司の両名が担当した。
- 4 付、大分市の横穴墓集成図中、穴蟹喰および蟹喰横穴については大分市教育委員会讃岐和夫、池辺千太郎氏の許可を得て第7回大分県考古学会中津大会シンポジウム「日本の横穴墓」資料2から転載したものである。両氏に謝意を表したい。それ以外の図は各報告書等から、一部省略して転載した。
- 5 本書の執筆、編集は高橋が行った。図面作成、校正等で小林昭彦、井口あけみ、東冬子他の多大な助力を得た。

本文目次

I はじめに	1
II 調査の内容	5
III まとめ	8
IV 付 大分の横穴墓	16

挿図目次

第1図 岩崎横穴墓周辺の主要遺跡分布図	3
第2図 岩崎横穴墓位置図	6
第3図 岩崎横穴墓配置図	7
第4図 岩崎横穴墓立面図	7
第5図 1号横穴墓実測図	8
第6図 2号横穴墓実測図	9
第7図 横穴墓の分類・編年図	13

I. はじめに

1) 調査の経過

岩崎横穴墓は大分川支流の七瀬川が大きく蛇行する位置にある。この周辺地区には1987年代から、建設省によって七瀬川河川改修事業が行われており、これに付随する埋蔵文化財の調査が行われてきた。岩崎横穴墓から1.5km下流の植田市遺跡では総面積34,000㎡におよぶ調査で、縄文時代から近世にかけての多くの遺構や遺物が検出されている。平成7年5月、建設省九州地方建設局大分工事事務所より、大分県教育委員会に対して河川改修事業の対象地区となった口戸地区周辺の文化財についての調査依頼があり、県では工事計画域に周知の岩崎横穴墓が存在することから、その取り扱いについて協議を行った。しかしながら、すでに横穴墓の間近まで堤防の工事が進んでおり、この段階での設計変更は不可能であり、工事にかかる横穴墓も分布調査の段階では2基と少なく、本調査にもかかわらず大幅にその数が増えることは考えられないため、記録保存の調査を実施することになった。

梅雨明けの7月から調査を始めたが、足場等の組み立ておよび撤去を含め、およそ20日間で終了した。開口した2基の横穴墓には、戦後しばらく人が住んでいたということであった。横穴のある丘陵の崖面や、頂部の表土を取り除き、遺構の検出を試みたが、上記2基の横穴墓以外は何んの遺構も存在していなかった。

2) 調査の組織

調査指導	愛媛大学教授		下條信行
調査主体	大分県教育委員会		
総括	大分県教育委員会	教育長	田中恒治
	◇	文化課課長	末広利人
調査主任	◇	文化課主幹兼埋蔵文化財 第1係長	清水宗昭
調査担当	◇	埋蔵文化財第1係副主幹 嘱託	高橋 徹 渡辺桂司



第1図 岩崎横穴墓周辺の主要遺跡分布図

- | | | |
|-----------------|--------------------|-------------------|
| 1 岩崎横穴墓群 (古墳) | 15 虎御前古墳 (古墳) | 29 岩御堂横穴墓群 (古墳) |
| 2 浅草神社古墳群 | 16 下ヶ迫古墳 (古墳) | 30 餅田古墳群 (古墳) |
| 3 千人塚 | 17 漆間横穴墓群 (古墳) | 31 餅田横穴墓群 (古墳) |
| 4 御陵古墳 (古墳) | 18 六部塚古墳 (古墳) | 32 井手ノ上横穴群1 (古墳) |
| 5 木ノ上古道石棺 (古墳) | 19 大曾3横穴墓群 (古墳) | 33 井手ノ上古墳 (古墳) |
| 6 土肥横穴墓群 (古墳) | 20 大曾2横穴墓群 (古墳) | 34 井手ノ上横穴群墓2 (古墳) |
| 7 木ノ上峠横穴墓群 (古墳) | 21 大曾横穴墓群 (古墳) | 35 上片面横穴墓群 (古墳) |
| 8 志土地横穴墓群 (古墳) | 22 椿ヶ丘横穴墓群 (古墳) | 36 丑殿古墳 (古墳) |
| 9 山伏古墳群 (古墳) | 23 小野鶴横穴墓群 (古墳) | 37 万寿山古墳群 (古墳) |
| 10 稲荷古墳 (古墳) | 24 雄城台下横穴墓群 (古墳) | 38 深河内古墳 (古墳) |
| 11 世利門古墳 (古墳) | 25 雄城台遺跡 (弥生~中世) | 39 田崎古墳群 (古墳) |
| 12 漆間古墳 (古墳) | 26 深町遺跡 (弥生) | 40 種田市遺跡 (縄文~近世) |
| 13 大將軍古墳 (古墳) | 27 豊後園分寺跡 (古代) | |
| 14 高来山横穴墓群 (古墳) | 28 賀来中学校遺跡 (弥生~中世) | |

2) 岩崎横穴墓の位置と歴史的環境

岩崎横穴墓群は、大分市大字口戸字岩崎に所在する。南北方向に延びる木ノ上丘陵の南端に位置する。大分市街の南部にあたり、竹田方面から大分地区に入る交通の要地となっている。ほぼ北東に流れ下る七瀬川はこの丘陵によって行く手を阻まれ大きく向きを変え、当該地点で再び大きく蛇行する。丘陵南端部は鎌倉時代と伝承⁽¹⁾される古井路によって切り落とされている。七瀬川を挟んで南を臨めば、雲山を頂点とする標高596mの山腹が眼下に迫ってくる。近年の宅地造成によって周辺地域の環境は急速に都市化しているが、七瀬川の中流域として、かろうじて「田園」の面影を残している地域である。

七瀬川流域は平坦な沖積地となっており、先史・原始以来生活の場として用いられていたようであり、約2万年前の後期旧石器時代のナイフ形石器等が雄城台遺跡や穂田市遺跡から出土している。縄文時代の終末から弥生時代の早期になると、河川流域の微高地において突帯文土器の出土が目立ってくる。穂田市遺跡⁽²⁾、深町遺跡⁽³⁾、二反田遺跡、穂田平石遺跡⁽⁴⁾と枚挙に暇ないほどである。水田稲作のための土地利用の嚆矢というべきであろうか。弥生時代前期になると、雄城台丘陵上に拠点弥生集落⁽⁵⁾が形成される。数次の調査によって、弥生前期後半から終末までの住居跡が検出されており、石包丁、大陸系磨製石器、鉄器のほかに後漢鏡片や国産青銅器の「巴形銅器」などが出土している。雄城台丘陵は下の沖積面とおよそ50mの比高差を有するが、この低地においても弥生時代終末～古墳時代初頭の溝状遺構やこれから発見された弥生時代小型仿製鏡がしられており⁽⁶⁾、高低の区別無く生活空間として利用されていたことがわかっている。穂田市遺跡で検出された溝の遺構（溝1）にも弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が廃棄されており、ここでは古墳時代（5世紀後半）の壙付き住居跡も出土している。

近接する穂田平石遺跡では6世紀後半の水田跡と推測される遺構が調査されており、断続的にせよ、連続的にせよ連続と続く人々の農耕の営みを確認できる。

こうした生産や生活遺構のほかに、墳墓遺跡も存在する。岩崎横穴墓のある木ノ上丘陵には浅草神社古墳群、木ノ上古道石棺、御陵古墳があり古墳時代前期の首長およびそれに連なる集団の墳墓と考えられている。御陵古墳⁽⁷⁾は全長62m、後円部径44mの前方後円墳で、墳丘から埴輪や葺石が出土する。後円部中央に箱式石棺を直葬していた。鉄鍬や三角板革織短甲、勾玉などが副葬されており、壺形や円筒埴輪の特徴からみて5世紀の前葉に築かれたものと思われる。御陵古墳の北1kmにある下ヶ迫古墳⁽⁸⁾は直径約20mの円墳で、主体部には板状に加工した凝灰岩製の組み合わせ箱式石棺を用いている。棺内には鉄刀や小型の擬文鏡が副葬されていた。石棺や鏡などの型式からみて5世紀の後半のものである。この頃になると北部九州をはじめとし、全国的にも横穴式石室を設けた古墳が盛んに築かれるようになるが、大分なかでも豊後地域ではこれが非常に少なく、かわりに丘陵斜面や崖面を穿った「横穴墓」が営まれるようになる。横穴墓自体は北部九州に最古の一群が知られており、大分の横穴墓もこうした地域からの伝播によるものであろう。木ノ上上坪の高来山横穴墓⁽⁹⁾はそうした横穴墓の中でも、古く位置づけられるものである。6世紀代になると、大分平野の各所で横穴墓の造営が始まり、それぞれ一定規模の群集墓を形成している。岩崎横穴墓の周辺に限っても漆間横穴墓群、志土地横穴墓群、土肥横穴墓群、雄城台横穴墓群、高瀬横穴墓群等が分布する。

古代末～中世の口戸地区は、豊後国因幡にいう「穂田庄」2百25町2段に含まれていたものと考えられる。左大臣藤原頼長をはじめ中央権門貴族の所有する荘園として推移したが、最終的には在地領主（穂田氏他）にその実権が移っていったと思われる。岩崎横穴墓から50m程の崖にある口戸石仏（鎌倉末～室町時代）や七瀬川を挟んだ対岸の高瀬石仏⁽¹⁰⁾（平安時中期）など近隣に点在する石仏はそうした歴史を反映しているであろう。

註(1) 「古井路碑」と銘うった石碑が丘陵頂部に建てられていた。これは明治に建てられたもので次のような内容である。「古井路由来不明履口戸村野伊三郎氏保存古書建久三年壬子三月竣功明文依建是碑 建碑発起人 世話人 木上柴崎順吉…略」

(2) 吉田 寛 1988-1992 「穂田市遺跡」I-V 七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査概報 大分県教育委員会

- (3) 綿貫俊一 1993 『深町遺跡発掘調査報告書』 大分県教育委員会
 (4) 染矢和徳 1994 『植田平石遺跡』 大分県教育委員会
 (5) 高橋信武 1987 『雄城台—第8次発掘調査の概要』 大分県教育委員会
 (6) 小柳和宏 1995 『植田条理遺跡』 『大分県埋蔵文化財年報』 3 大分県教育委員会
 (7) 小田富士雄 1972 『御陵古墳緊急発掘調査』 大分県教育委員会
 (8) 1984年、大分市教育委員会調査。報告書未刊。
 (9) 杉崎重臣 1964 『木ノ上・高来山の横穴古墳』 『大分県地方史』 32・33号
 (10) 浜田耕作 1925 『豊後磨崖石佛の研究』 『京都帝国大学文学部考古学研究報告』 第9冊

II. 調査の内容

1) 立地

北から南に向かって延びる木ノ上丘陵の南端には標高73.6mの小山があり、その南側は急峻な崖となっている。さらに、南西側は相当規模の崖崩れで殆んど垂直の壁面を形成している。岩崎横穴墓のある丘陵（以下岩崎丘陵と称す）はこうした崩落にあって辛うじて残存した丘陵の最先端部にあたる。丘陵本体と古井路によって切断されて、独立丘陵状になっている。この丘陵の基底部に測ったおおよその長さ、幅は14m四方におさまる。丘陵の頂部は幅3m、長さ10mの平坦面に加工されており、中央には近年まで据えていた古井路の顕彰碑基段跡が残っていた。岩崎丘陵の南東側は崖になっており、この崖面に、開口した2基の横穴墓が存在する。横穴墓の内部には大きなゴミや土砂はなく、薄く堆積した埋土を除去しながら遺物等の発見に努めた。なお2基の横穴墓以外、他の遺構は何も発見されなかった。

2) 1号横穴墓

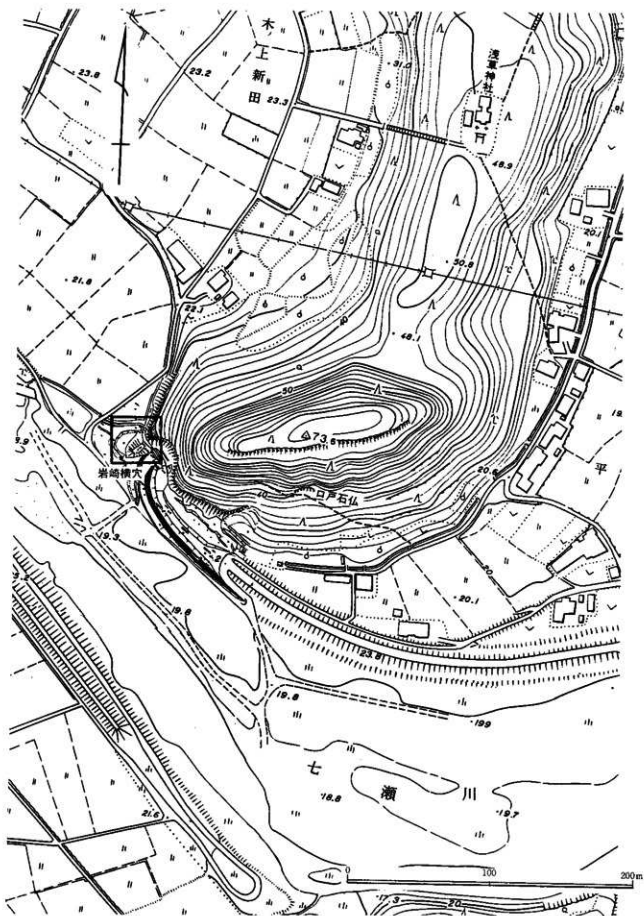
1号横穴墓は丘陵の基底部近くにある。玄室床面の標高はおよそ20.5mである。玄室前方から羨門部、羨道部は削平され消失している。残された玄室自体にも、壁面や床に後世加えられた削平や加工、釘の跡等があり、戦後しばらくの間、この横穴に居住していた人がいたとの話を裏付けている。横穴墓の玄門付近は後世の利用の際に入り口として利用されていたらしく、階段を削り出している。この前面は一段低くなっており、砂礫が堆積していた。トレンチを入れて調べたところ、昭和初期の硬貨やビール瓶等が出土した。

1号横穴墓の玄室平面形は、両袖を有す略方形のものであったと思われる。奥行1.72m、左右幅2.0mを測る。奥壁はやや内傾しながら立ち上がり、高さ約1mの平らな天井に続く。横断面および縦断面とも長方形を呈する。横穴は南南東方向に開口する。入口正面には二重の飾縁が設けられていたらしく、その痕跡がわずかながら残っていた。遺物の出土はない。

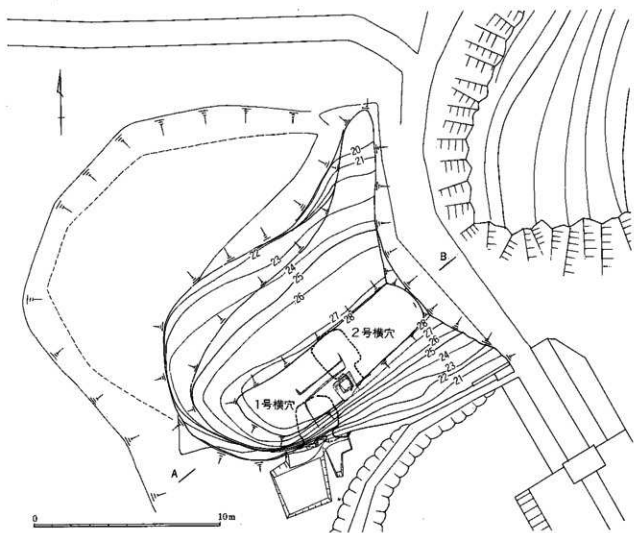
2号横穴墓

2号横穴墓は1号横穴墓の北東、斜め上にある。床面レベルで比較すると、1号墓よりおよそ3m上方になる。岩崎丘陵の東南崖面のほぼ中央に位置する。

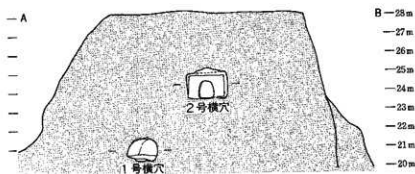
玄室、羨道、前庭部からなり、南東向きに開口する。玄室は隅丸長方形で長さ2.2m、幅2m。横断面は蒲鉾状を呈する。奥壁は床面から20cmほど立ち上がった後、傾斜しながら天井部に続いている。天井高は約1m。羨道は長さ70-90cm、幅70cm、高さ80cmで、これを通り抜けると二重の飾縁を設けた前庭部となる。床面は玄室から前庭部へ緩やかに低くなっている。正面からみた飾縁は、最外縁で横2.2m、縦1.2mと非常に整ったものである。その表面は刃部幅の狭い工具によって丁寧に削られたものである。当横穴墓からも関連する遺物は皆無である。



第2図 岩崎横穴墓位置図



第3图 岩崎横穴墓配置图



第4图 岩崎横穴墓立面图

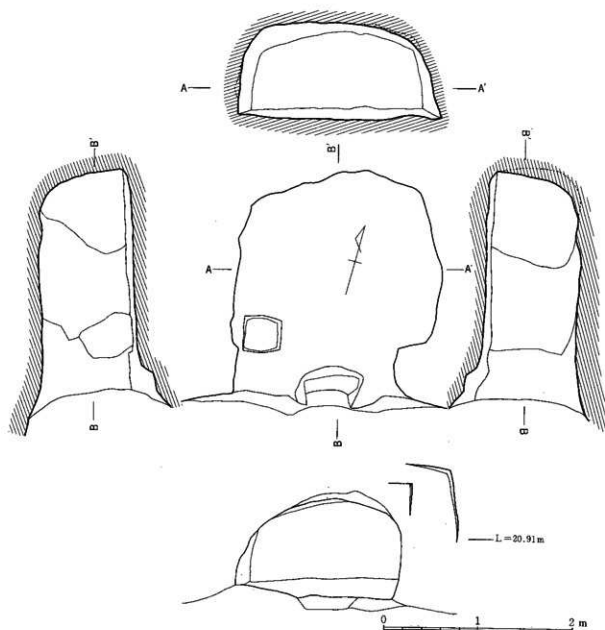
Ⅲ. まとめ

研究略史

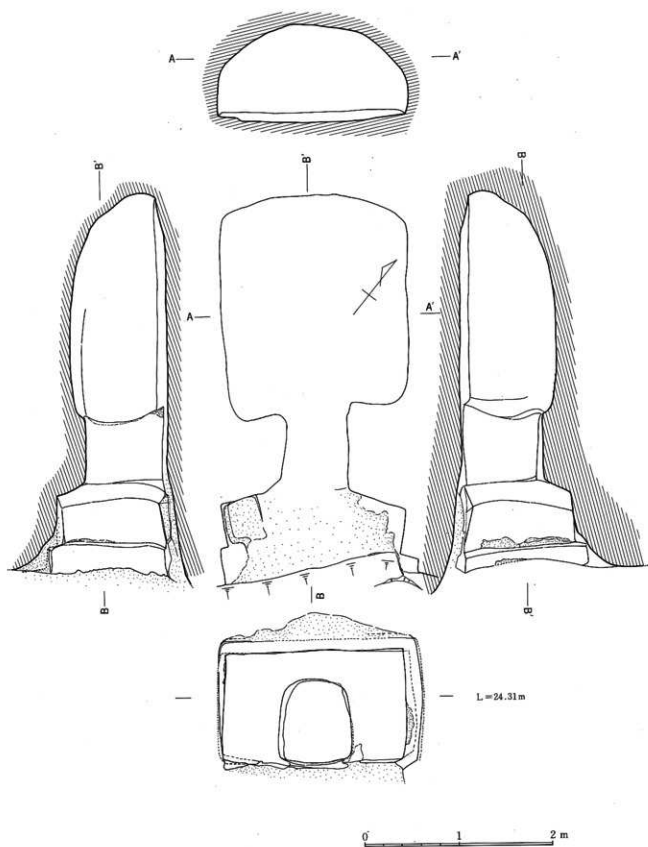
横穴墓の研究で大分県における横穴墓の調査は大きく三期の画期を設定できる。

I期：1922年～1931年

広瀬幸吉（1922「横穴古墳」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』1）を嚆矢とするものであるが、これは「下毛郡山口村字諫山、成恒、三保村字洞上及び宇佐郡長峯村横山村ノ如ク、壘前平野をメグルル丘陵ヲ有セル村々ニハ往々百穴ノ称アル地アリ大小數十ノ横穴群」が有り、「珍奇ノ形式」や「歴史年代推定ノ資料トスベキ」ものは見あたらないが、「考古学上貴重ノ材料」であり、「地方ノ人々ニ古代ノ墳墓ニシテ祖先ノ神靈ノ宿ル所ナルヲ」理解させるべく保存を心がけねばならないというものである。横穴墓それ自体についての具体的な言及はない。



第5図 1号横穴墓実測図



第6图 2号横穴墓实测图

翌年の「大分県史跡名勝天然記念物調査報告書2輯」では本荘昇・前田多三郎によって、緒方郷の横穴地名表が掲げられ、総数48例が紹介されている(本荘昇・前田多三郎1923)。その後日田、大在村(現坂の市)、宇佐、大野、直入、玖珠と調査地は全県下に及んだ。これらは主として横穴の分布調査を主体にしたもので、1期は横穴墓の地名表作成、すなわち資料の集積が開始された段階と位置づけられる。

Ⅱ期：1960年～1970年代

I期の後に長い空白期をおいて、1960年代になると小規模ながら、個別の横穴調査・紹介が行われるようになる。特に杉崎重臣が行った、大分市高来横穴墓の調査は古式の横穴墓の調査例であり、今日でもこの横穴墓の価値は変わらない(杉崎1964)。1970年代になると県文化課に埋蔵文化財の発掘調査体制が整備され、比較的規模の大きい現代的な調査が可能となるが、大分市坂ノ市所在の飛山横穴墓はこうした調査の代表である。ここでは総数32基の横穴墓が調査され、盗掘を免れた横穴墓から須恵器や馬具、鉄製武器など豊富な副葬品が検出され、横穴墓が横穴石室を主体にするいわゆる群集墳にひけをとらないものであることを強く印象づけた(真野・渋谷1974)。

Ⅲ期：1980年代

1970年代末期～80年代はじめにかけて行われた福岡県竹並遺跡の横穴墓調査はその規模や、初現期の横穴墓を確認したことなどで、横穴墓研究、調査史上の転機を画するものであった(竹並遺跡調査会1979)。これをふまえて行われた大分県三光村の上ノ原横穴墓群の調査および研究によって、横穴墓の被葬者についての従来になく知見を得るようになった。(田中・土肥・船越・永井1985)

調査手法としては、詳細な墓道堆積土層の観察と被葬者の人骨分析により

- 1 追葬回数 の 認 定。
- 2 埋 葬 人 骨 の 性 別 と、年 齢、親 族 関 係 の 認 定。
- 3 追 葬 時 期 の 決 定。

などを追求したもので、多くの新見解が提示される成果を生んだ(村上1982～86・田中良之1988)。

このかん、大分県中津市で開催した横穴のシンポジウムはこれらの成果を受けて展開した全国規模の横穴墓研究会として重要な意義を有したものであった。

これによって、各地の横穴墓の実体が判明し、横穴墓の全国的な集積が行われている(第7回大分県考古学会中津大会シンポジウム「日本の横穴墓」)。シンポジウムの成果として以下のことが判明・確認されている。

- 1 初期横穴墓は豊前地方を中心とした北九州地域に出現した。
- 2 出現時期は5世紀の後半である。
- 3 横穴墓が盛行するのは6世紀代で、この段階では北部九州以外にも横穴墓が採用されていく。大分、山陰、近畿でも出現期の横穴墓は豊前のものに形式が類似しており、出自はこれに求められると言う。
- 4 瀬戸内、特に四国に横穴墓は皆無である。

横穴墓研究の今後の課題

上ノ原横穴墓の調査以降も大分県下では大・小規模な横穴墓の発掘が行われている(日田市小迫横穴墓群、玖珠町四日市の上ノ原横穴墓群、同鷹巣横穴墓群、大分市長谷横穴墓群、弥生町小倉横穴墓群等)。今後の横穴墓調査に求められる課題としては、

- 1 上ノ原横穴墓群の調査で提出された、親族モデルなどの上ノ原類型の是非を各地の横穴で検証すること。
- 2 各地の横穴墓の地域差、形式、階層性、等を把握し、相互の系譜関係、集団関係を追求すること。
- 3 横穴墓造営集団の歴史の実体を把握する。

等々がある。大分県の後期古墳時代の墳墓としては横穴式石室墳は数が少なく、その殆どは横穴墓である。後期古墳時代は日本列島に中央集権国家が成立するにあたっての前史段階であり、政治・文化・経済における「中央

と「地方」の格差が明瞭になってゆく一過程である。こうした歴史的動向を把握し、分析する具体的な資料として、横穴墓の資料的価値は高い。したがって、盗掘に遭い、あるいは開口し、あるいは半壊した横穴墓1基といえども調査し、記録に残す努力が必要である。横穴墓研究の第Ⅳ期はこうした資料の集積のうえに、後期古墳時代の大分の地域史（土地の開発史、集団関係、他地域との交渉史等々）が叙述される段階と位置づけられるはずである。

横穴墓の型式分類

横穴墓は盗掘されたものが多く、造営時期を示す遺物が出土しない場合が多い。そのため横穴墓自体の構造形式で時期を推定する必要があり、横穴墓の形式分類とその編年が試みられてきた（小田富士雄1975「横穴墓総覧」歴史読本20巻8号。佐田茂1975「九州横穴の形式と時期」考古学雑誌61巻1号。池上悟1980「横穴墓」ニューサイエンス社）。

大分県下の横穴墓については、村上久和、池辺千太郎の先行研究がある^[1]。とりわけ池辺氏は近年、精力的にこの問題に取り組んでおり、その編年観（池辺1990）は大筋で妥当なものとなっているがもう少しシンプルでかつ細かい型式分類や編年が可能と考えられる。ところで、最古式の横穴墓は初期横穴墓と総称され、5世紀代に遡ることが確認されており、村上久和の一連の研究が存在する。詳細はこれに譲るが、この初期横穴墓の段階において既に、共通の型式学的な特徴には地域色と言いつる差異が存在することは興味深い事実である。また出現期の最古式の横穴墓が必ずしも追葬による複数埋葬を行っているわけではないという事実もまた横穴墓出現の経緯を考えるにあたって十分に留意されなければならない。

大分の6世紀代の横穴墓玄室床面形は長方形・方形のものが基本で、これに天井中央部に向かって四壁をだんだん狭めてゆく(1)ドーム状の天井部を有するもの、(2)横・縦断面が藩錐状の平天井のもの、(3)寄棟屋根形天井のものに大別される。豊前では(2)の平天井のものが主流で、日田玖珠地区では高さのある(1)ドーム天井のものが目立つ。大分市域では平天井のものが主であるが、古式のものには屋根形や高さのあるドーム天井のものが比較的多い。こうした天井型の差異はそれぞれ地域的な広がりを持っており、造墓工人の地域色や技術的な系統を反映するようである。最終的にはこうした地域、系統毎の型式分類と編年がなされなければならない。ここでは、大分市域の6-7世紀の横穴墓を以下のように整理する。（第7図）

I類

玄室は四壁が垂直に立ち上がり、天井部との境が明瞭で、鴨居状の段を有する。比較的天井部の高いもの（I-a類）と、天井部が低くなったもの（I-b類）に細分される。

I-a類（飛山4号墓式）

上ノ原21号墓、飛山1号墓、同4号、下郡2号墓、大曾12号墓、滝尾9号墓などを標識とする。

上ノ原21号墓からはMT15式の須恵器が、飛山4号墓ではMT85式、同1号墓からはTK-43式の須恵器を副葬することから、この期はMT15式～TK43式に行われたことがわかる^[2]。

I-b類（飛山14号墓）

下郡5号墓、同13号墓、大曾8号墓、蟹喰8号墓などを類例とする。14号墓からはTK43式が出土しており、6世紀後半に中心がある。I類で最古例は豊前南部の三光村所在上ノ原横穴墓群で確認されており、豊後の大分市域に存在するI-a類はこの地域から伝わったものであろう。I類の最新例はI-a類、I-b類ともTK43式の時期が比定される。

Ⅱ類

玄室の鴨居状天井部が姿を消し、側壁面と天井部の境が前段階よりも不明瞭になる。床面から垂直に立ち上がっていた壁も、天井部に向かって内湾気味になる。横断面は藩錐の横断面状を呈する。縦断面でも、奥壁と天井の中心部までは極めて緩やかではあるが湾曲を残している。天井までの高さがあるもの（Ⅱ-a類）と天井高がそれほどないもの（Ⅱ-b類）にわける。

Ⅱ-a類（飛山3号墓式）

飛山3号墓、同29号墓、蟹喰4号墓、滝尾百穴14号墓などを標識とする。このうち最も遅るものは、飛山3号墓でTK43式の須恵器を副葬する。

Ⅱ-b類（飛山13号墓式）

Ⅱ-a類に後続する時期として飛山13号墓、屋宗1号墓、大曾7号墓、蟹喰1号墓を想定する。屋宗1号墓ではTK209式が確認される。

以上のようにⅡ類の時期を6世紀後葉～7世紀前葉に比定する。

Ⅲ類（飛山7号墓式）

玄室天井部が低くなる。横断面では高さの低い蒲鉾状を呈するが、縦断面では天井上面が平坦に表現されるようになる。

飛山7号墓、飛山30号墓、下郡12号墓、下郡7号墓、蟹喰9号墓などがこれに分類される。次のⅣ類との比較で、Ⅲ類を7世紀前葉～中頃に位置づける。

Ⅳ類（屋宗4号墓式）

玄室の横断面、縦断面共に長方形の箱形を呈するもの。屋宗3号墓、4号墓、飛山5号墓、蟹喰10号墓を標識とする。日田市羽野横穴二次調査1号墓はⅣ類の中でも新しい段階に比定できるが、渡門付近からTK217式あるいはTK46式の須恵器が検出されており、本式の盛行時期を7世紀中頃の後葉に行われたものとする。

岩崎横穴墓

2基の岩崎横穴墓とも、開口して既に久しいらしく、関連する遺物の出土は皆無であった。渡門に二重の飾縁を設けており、低い天井、蒲鉾状の横・縦断面と共通する要素が多い。近接した時期のものであろう。これまで行われた横穴墓群の調査によると、同一群の横穴墓で、高所にある横穴墓は低位置にあるものより古い例が少なからずあり、であれば、本件の場合でも、高所にある2号墓が1号墓より先に造られた可能性が高い。2号横穴の型式はⅡ-b類の最も新しい段階に位置づけられ、7世紀の第2四半期に、1号横穴墓はⅢ類（飛山7号墓式）の古段階で、7世紀中葉に比定できよう。

大分平野周辺の横穴墓は5世紀後半の木ノ上高来山横穴墓を嚆矢とし、6世紀の前半頃に導入の面がある（第1段階、導入期）。以後6世紀中頃～7世紀前半と一般化し、盛行する（第2段階、盛行期）。7世紀の第3四半期を過ぎると新たな造墓は停止し、横穴墓の終焉を迎えることになる（第3段階、終焉期）。岩崎横穴墓はまさにこの第3段階に位置づけられるものである。これまでの研究成果によれば、横穴墓群の造営主体は在地の武装した有力農家家族であることが想定されている。古墳時代後期に活発化する鉄生産や、鉄製農具の普及と、第2段階の横穴造墓活動は連動しており、累代的に続く単位集団の共同墓地としての、横穴墓群形成それ自体が、在地集団の血縁的・地縁的の再生産や展開、結束力を誇示しているように思われる。第3段階が大化の薄葬令に象徴される、古墳時代的なものの廃棄に呼応したものであろうことは、大方の意見の一致するところであろう。

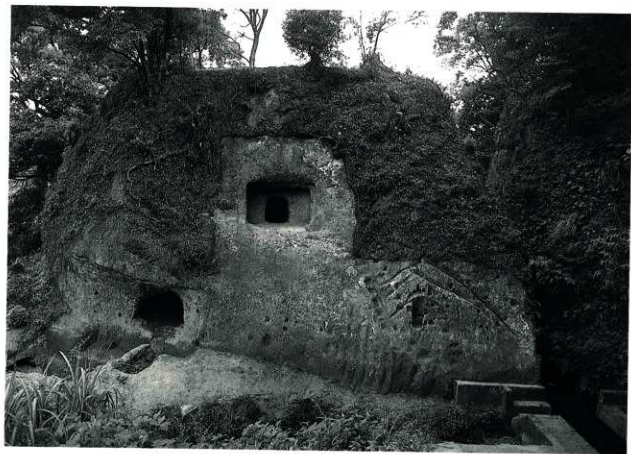
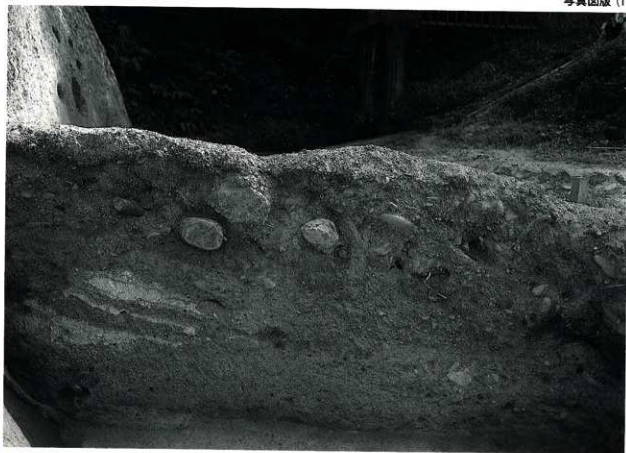
注1 池辺氏は豊後地域の横穴墓の実測図を作成・集成し、その横穴墓の形態上の変遷を整理している（池辺1990、1995）。池辺の分類および変遷観と私見の違いは、私見が①横穴の玄室横・縦断面形を最重要視してシンプルな「型式」の定義をしていること、②その各「型式」の存続時期を、伴出する須恵器の型式で文節的に位置づけていることである。横穴墓の型式と編年は、地域色や系譜関係の把握のために今後さらに細分されるべきものであり、そうした共同作業を行い易くするために、あえて標準資料を示し〇〇式という定義を行ってみた。

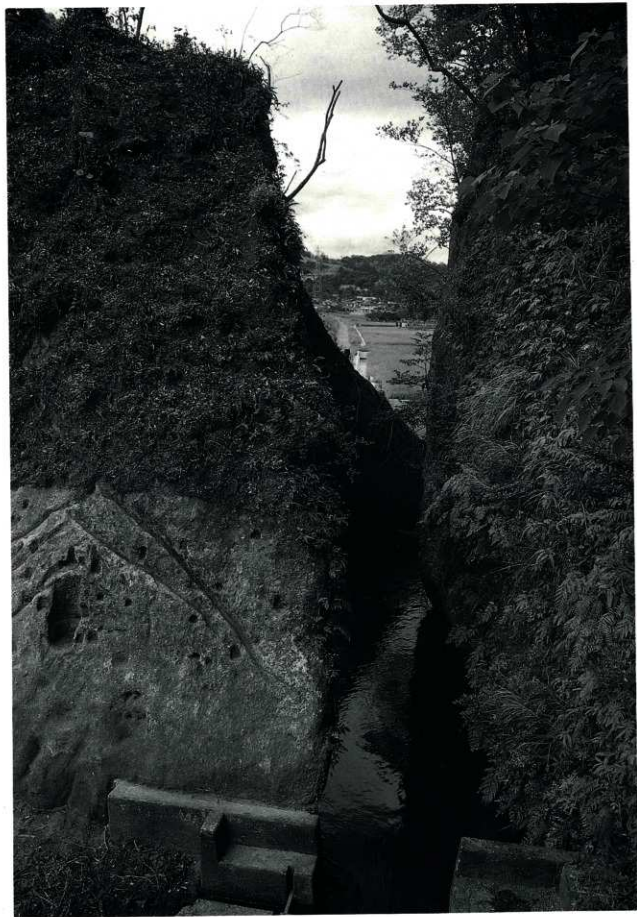
2 本稿で用いる須恵器編年は基本的に田辺昭三「陶邑」による。九州須恵器編年を代表する小田富士産編年と田辺編年との互換、またその実年代観は、高橋・小林（高橋・小林昭彦1990「九州須恵器研究の課題—岩戸山古墳出土須恵器の再検討—」『古代文化』第42巻4号）に拠る。内容は以下のとおりである。TK733式は5世紀の前半。TK208式は5世紀の第3四半期。TK47式は崎玉

果穂荷山古墳および熊本県江田船山古墳から出土しており、これらが辛亥銘の鉄刀に伴うことから、TK23式・TK47式をおよそ雄略の時代の5世紀第4四半期に、MT15式は継体朝の6世紀の第1四半期前後、TK10式を6世紀の第2四半期に、MT85を同第3四半期にする。これらは欽明朝の須恵器と考えられよう。TK43式は藤ノ木古墳や見瀬丸山2号石棺に該当し（和田晴吾1996「見瀬丸山・藤ノ木古墳と六世紀のヤマト政権」『状況』五月別冊）、これらの被葬者が587年死亡の穴穂部・宅部皇子（前園実知・白石太一郎1995『藤ノ木古墳』）や571年に死亡の欽明天皇に比定される可能性が強く（和田晴吾1996「見瀬丸山・藤ノ木古墳と六世紀のヤマト政権」『状況』五月別冊）、また587年ごろに建立が開始された、飛鳥寺の下層整地層にTK43式の須恵器が含まれていることから、これを6世紀の第4四半期に比定できる。TK209式（飛鳥 1）を7世紀の第1四半期に、TK217式（飛鳥 2）を7世紀の第2四半期に、TK46式を7世紀の第3四半期にあてる。

	I 類		II 類		III 類	IV 類
	a	b	a	b		
	飛山1号式	飛山14号式	飛山3号式	飛山13号式		
玄室縦断面						
玄室横断面						
玄室床面形（平天井系）						
上ノ原21号						
玄室縦断面						
玄室横断面						
玄室床面形（トムケ突井系）						
日田羽野						
須恵器型式						
	MT15式	TK10式	MT85式	TK43式	TK209式	TK217式
						MT46式

第7図 横穴墓の分類・編年図



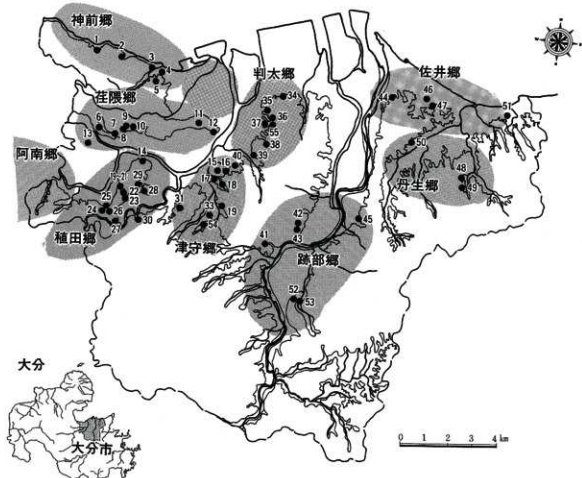


IV. 付 大分市の横穴墓

1) 分布について

大分市域の横穴墓群は現時点で55カ所を数え、その総数はゆうに350基を越えている。巨視的に眺めると、これらの横穴墓群は均一な地理的分布を示さず、一定の地理空間を占有した状態で存在しているようである。例えば、神崎横穴墓から生石横穴墓(1-5)にかけての複数横穴墓群は賀来川左岸の餅田横穴墓、井手ノ上横穴墓の複数横穴墓とは別の地理空間にある。これらの横穴墓群は水利や地形的なまとまり等を共有する集団の生活圏を示すものであり、であれば、こうした生活圏を地域的な行政単位として把握したと考えられる古代律令期の郷の想定地をも表現している可能性が強い。下図に郷推定地①との対応を示した。なお11、12の横穴墓は上野丘北部に比定されている笠和郷域に関係するのかもしれない。

注1 出田和久 1987「大分・海部の諸郷」「大分市史」上 頁717~724、大分市教育委員会。



大分市所在横穴墓分布図 (※番号は次頁の横穴墓地名表に対応)

2) 大分市所在の横穴墓地名表

番号	所在地		立地	種別	時代	現状	備考
1	神崎横穴墓	神崎字前田	丘陵	墳墓	古墳	山林	
2	白木横穴墓群	下白木	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
3	蟹喰横穴墓群	神崎字蟹喰	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	消滅
4	穴蟹喰横穴墓群	八幡字平	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
5	生石横穴墓群	八幡字南生石	丘陵中腹	墳墓	古墳	山林	
6	岩御堂横穴墓群	宮苑字中村	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
7	餅田横穴墓群	賀来字餅田	丘陵	墳墓	古墳	山林	
8	井手ノ上横穴墓群1	賀来字井手ノ上	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
9	井手ノ上横穴墓群2	賀来字井手ノ上	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
10	上片面横穴墓群	賀来字上片面	丘陵	墳墓	古墳	山林	
11	南太平寺横穴墓群	南大分字南太平寺	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	良好
12	岩屋寺横穴墓群	古国府	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	消滅
13	小原横穴墓	小原	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
14	小野鶴横穴墓群	小野鶴字下原	台地斜面	墳墓	古墳	山林 ¹⁾	
15	滝尾守岡横穴墓群	曲字守岡	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
16	曲迫横穴墓群	曲字迫	台地斜面	貝塚	古墳	山林	
17	曲平横穴墓群	曲字平	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
18	一の迫横穴墓群	曲	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
19	大曾横穴墓群	田原字大曾	丘陵斜面	墳墓	古墳	住宅	一部消滅
20	大曾2横穴墓群	田原字大曾	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
21	大曾3横穴墓群	田原字大曾	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
22	漆間横穴墓群	木ノ上字上芹	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
23	高来山横穴墓群	上芹字高来	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
24	志土地横穴墓群	木ノ上字西ノ裏	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
25	木ノ上峠横穴墓群	木ノ上	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	一部消滅
26	土肥横穴墓群	木ノ上字西ノ浦	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
27	岩崎横穴墓群	口戸字岩崎	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
28	雄城台下横穴墓群	植田	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
29	椿ヶ丘横穴墓群	上小野鶴	台地斜面	墳墓	古墳	住宅	消滅
30	高瀬横穴墓群	高瀬字加藤	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	

番号	所在地		立地	種別	時代	現状	備考
31	東山田横穴墓群	田尻字東山田	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
32	穴井下横穴墓群	葛野字穴井下	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
33	大久保横穴墓群	寒田大久保	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	良好
34	松栄山横穴墓群	東大分字松栄山	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
35	下郡横穴墓群	下郡字加納	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
36	北下郡横穴墓群	北下郡	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
37	穴井前横穴墓群	北下郡字穴井前	台地斜面	墳墓	古墳	山林	一部消滅
38	長谷横穴墓群	羽田字穴井ヶ追	台地斜面	墳墓	古墳	住宅	消滅
39	滝尾百穴横穴墓群	羽田字岩屋	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
40	碓山横穴墓群	津守	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
41	戸無瀬横穴墓群	判田字戸無瀬	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	一部消滅
42	一の谷横穴墓群	松岡字寺田	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
43	一の谷南横穴墓群	松岡字寺田	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
44	屋宗横穴墓群	角子原字屋宗	丘陵斜面	墳墓	古墳	住宅	
45	阿蘇入横穴墓群	宮川内字阿蘇入	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
46	尾崎横穴墓群	尾崎	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
47	城原横穴墓群	城原	台地斜面	墳墓	古墳	道路	一部消滅
48	城下横穴墓群	城下字久上	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
49	久土横穴墓群	久土	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
50	岡下横穴墓群	丹生字岡	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
51	飛山横穴墓群	東上野字百合野	台地斜面	墳墓	古墳	道路	消滅
52	東北平横穴墓群	中戸次字東北平	丘陵端	墳墓	古墳	山林	
53	西北平横穴墓群	中戸次字西北平	台地斜面	墳墓	古墳	山林	
54	旦那原横穴墓群	大分市大字旦那原字叶	丘陵斜面	墳墓	古墳	山林	
55	松女ヶ追横穴墓群	大分市大字下墓字松女ヶ追	丘陵斜面	墳墓	古墳	道路	

3) 大分県関係横穴墓参考文献

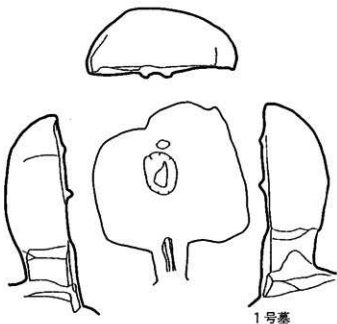
- 広瀬幸吉 1922 「横穴古墳」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』1
- 本荘昇・前田多三郎 1923 「緒方郷の横穴古墳」2 『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』2
- 弘津史文 1924 「豊後国日田横穴と包含地」『考古学雑誌』14-4
- 本荘昇・前田多三郎 1925 「城原横穴(北海道郡大在村)」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』4
- 広瀬幸吉 1927 「下毛郡古墳横穴一覧表」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』5
- 日名子太郎 1927 「宇佐郡古墳横穴一覧表」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』5
- 日名子太郎 1928 「宇佐郡古墳横穴調査補遺」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』6
- 日名子太郎 1929 「大野・直入両郡古墳横穴調査書」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』7
- 河野清美 1931 「玖珠郡北山田村の横穴」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告書』9
- 杉崎重臣 1964 「木ノ上・高来山の横穴古墳」『大分県地方史』32・33
- 衛藤宗宣 1967 「竹田市の横穴古墳群」『竹田高校研究シリーズ』7
- 玉水光洋・衛藤徹雄・日小田一郎 1968 「竜ヶ鼻横穴古墳の調査」『竹田高校研究シリーズ』8
- 渋谷忠章 1974 「福島地下式横穴—中津市福島所在—」『中津市文化財報告』
- 真野和夫・渋谷忠章 1973 「飛山」『大分県文化財調査報告書』28
- 佐田茂 1975 「九州横穴の形式と時期」『考古学雑誌』61-1
- 小田富士雄 1975 「北九州地方」『歴史読本』第20巻第8号
- 上野清志 1975 「横穴墓の地域性—九州—」『考古学ジャーナル』110
- 渋谷忠章 1976 「蟹喰横穴古墳」『日本考古学年報』27
- 真野和夫 1976 「竹田市原森山横穴出土遺物」『大分県地方史』84
- 藤田和夫 1978 「十一横穴古墳」『日本考古学年報』29
- 清水宗昭 1978 「雷横穴古墳」『日本考古学年報』29
- 竹並遺跡調査会 1979 『竹並遺跡』東出版寧楽社
- 小田富士雄 1979 「九州の横穴墓序説」『九州考古学研究—古墳時代篇』
- 高橋徹 1979 「北友田横穴古墳」『日本考古学年報』30
- 村上久和・吉留秀敏 1982 「大分県中津市上の原横穴墓群の調査」『古文化研究会会報』33
- 羽田野光洋 他 1983 「一六山横穴墓」三重町教育委員会
- 村上久和・吉留秀敏 1983 「大分県中津市上ノ原横穴墓群の調査」58
- 村上久和・後藤宗俊 1984 「大分県上ノ原横穴墓群」『日本考古学年報』34
- 後藤宗俊・村上久和 1984 「文化財レポート 大分県上ノ原横穴墓群の調査」日本歴史432号
- 小倉正五 1984 「宇佐の横穴墓群について」『地域相研究』15
- 江田豊 1985 「現場からの報告 横穴墓における葬送儀礼」『別冊考古学ジャーナル』251
- 吉武学 1985 「日田市羽野横穴墓群発掘調査概報」大分県教育委員会
- 村上久和 1985 「初期横穴墓の葬送と祭祀」『歴史手帳』13巻4号
- 村上久和 1985 「大分県上ノ原横穴墓の調査」『古文化研究会会報』49
- 村上久和 1985 「豊の横穴墓」『えとのす』29
- 土肥直美・田中良之・船越成威・永井昌文 1985 「大分県上ノ原横穴墓群出土の人骨をめぐって」『古文化研究会会報』49

- 玉永光洋 1985 「屋宗横穴墓」『大分県文化財調査報告書』74 大分県教育委員会
- 小林昭彦・小柳和宏・城戸誠 1987 「内河野遺跡・板井尾遺跡・朝鍋遺跡・稲荷山横穴墓群・肥後街道・ヤトコロ遺跡」『菅生台地の遺跡』XⅡ
- 棚田昭二 1987 「滝尾百穴横穴墓群について」『石垣考古』第2号
- 土肥直美 1988 「上ノ原横穴墓群出土人骨をめぐって」『三毛の文化』9
- 田中良之 1988 「上ノ原横穴墓群 被葬者の親族関係」『三毛の文化』9
- 小柳和宏他 1988 「小迫墳墓群」『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』大分県教育委員会
- 村上久和 1988 「発表要旨 九州・山口における初期横穴墓の様相」『古文化談叢』19
- 村上久和編 1989 「上ノ原横穴墓群」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ
- 高橋徹 1991 「上小倉横穴墓」『弥生町文化財調査報告』第1集
- 池辺千太郎 1989 「大分県小野鶴横穴墓」『立正考古』第29号
- 池辺千太郎 1990 「豊前・豊後の横穴墓形態変遷論」『大分考古』第3号
- 讃岐和夫 1990 「下郡横穴墓群」『大分市埋蔵文化財調査年報』1 大分市教育委員会
- 池辺千太郎 1991 「旦野原横穴墓群」『大分市埋蔵文化財調査年報』2 大分市教育委員会
- 佐藤良二郎 1991 「山ノ下横穴墓群 中原遺跡」宇佐市教育委員会
- 村上久和 1991 「北九州周辺の横穴墓」『大分考古』第4号
- 池辺千太郎・塔鼻光司 1992 「長谷横穴墓群」大分市教育委員会
- 染矢和徳 1992 「下綾垣横穴墓群」『九州横断自動車関係埋蔵文化財調査概報-日田～玖珠間-』2
- 讃岐和夫 1992 「小原横穴墓」『大分市埋蔵文化財調査年報』3 大分市教育委員会
- 村上久和 1993 「鷹巣横穴墓群」玖珠町教育委員会
- 友岡信彦 1994 「佐寺横穴墓群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報-日田～玖珠間-』大分県教育委員会
- 友岡信彦 1994 「夕田横穴墓群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報-日田～玖珠間-』大分県教育委員会
- 土居和幸 1995 「東寺横穴墓群」『大分県埋蔵文化財年報』3 大分県教育委員会
- 佐藤義敏他 1995 「四日市上ノ原横穴墓群」『大分県埋蔵文化財年報』3 大分県教育委員会
- 池辺千太郎 1995 「豊後の横穴墓」『風上記の考古学』4 同成社

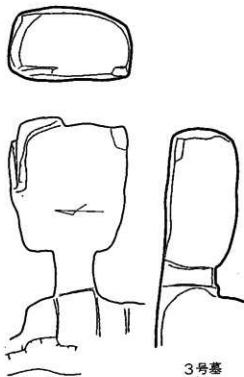
4) 大分市所在横穴墓実測図集成 (縮尺 $\frac{1}{60}$)

穴蟹喰横穴墓群 所在：大分市大字八幡字平

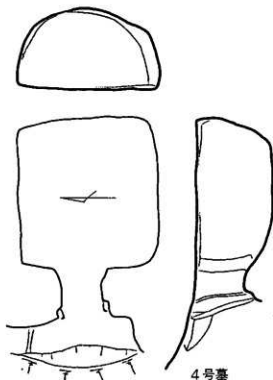
(地名表番号 4)



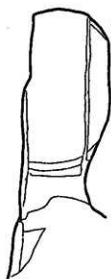
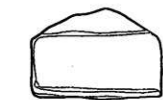
1号墓



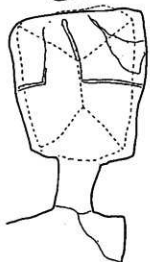
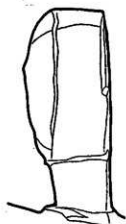
3号墓



4号墓



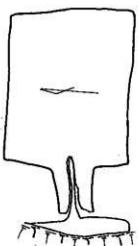
7号墓



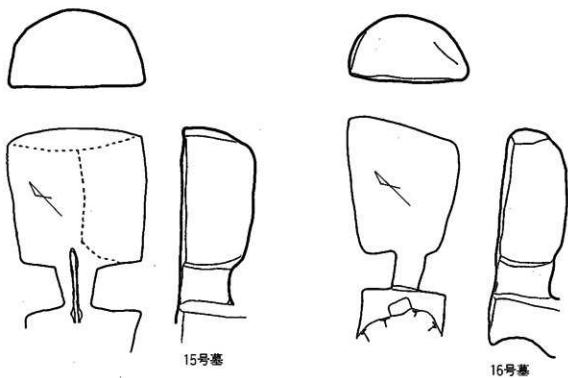
8号墓



9号墓



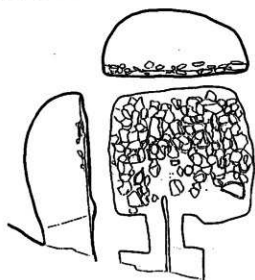
10号墓



蟹喰横穴墓群

所在：大分市大字神崎字蟹喰

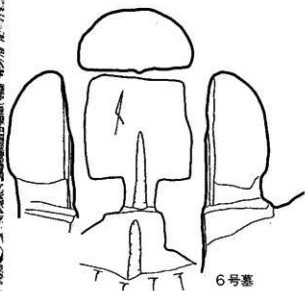
(地名表番号 3)



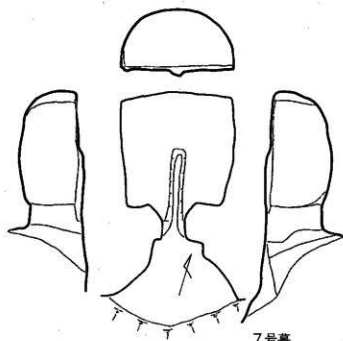
大曾横穴墓群

所在：大分市大字田原宇大曾

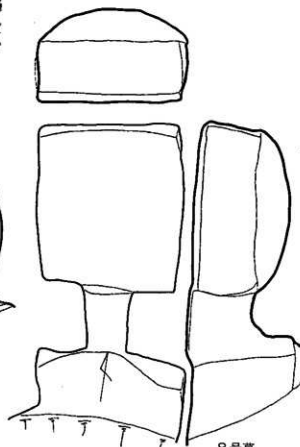
(地名表番号 19-21)



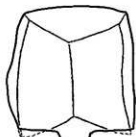
6号墓



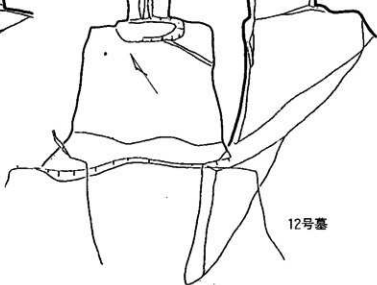
7号墓



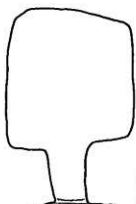
8号墓



10号基



12号基

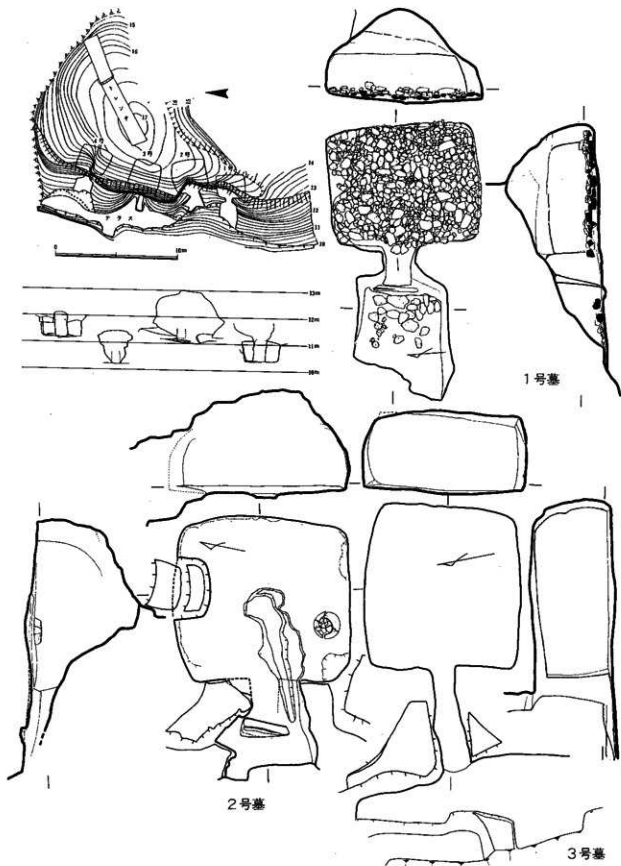


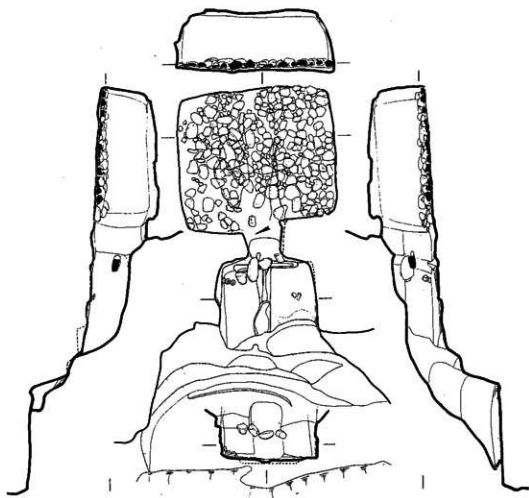
17号基

屋宗横穴墓群

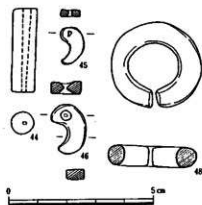
所在：大分市大字角子原

(地名表番号 44)





4号墓

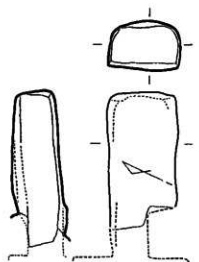
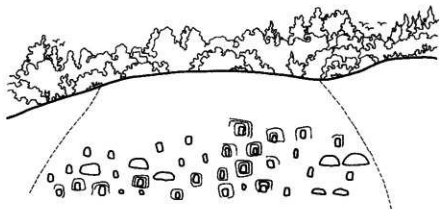


滝尾百穴横穴墓群

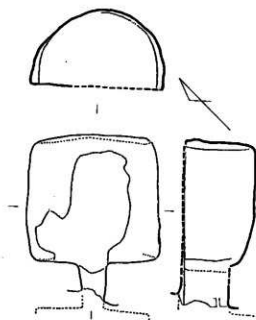
所在：大分市大字羽田字岩尾

(地名表番号 39)

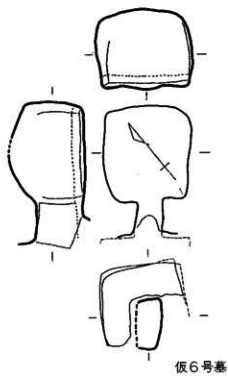
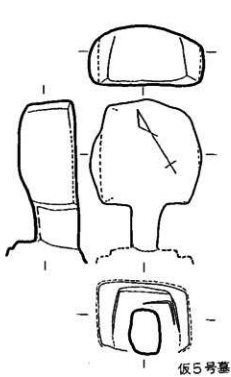
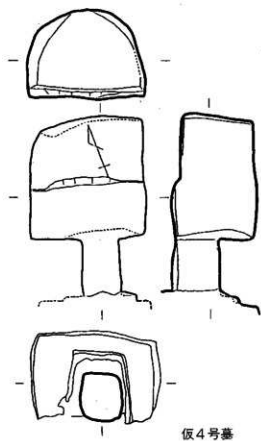
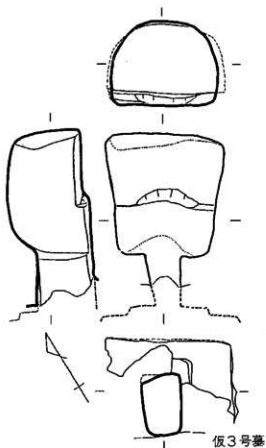
滝尾横穴墓群全景

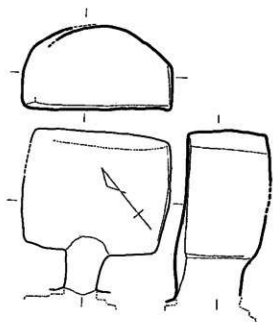


仮1号墓

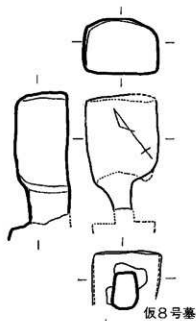


仮2号墓

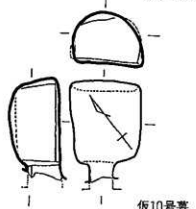




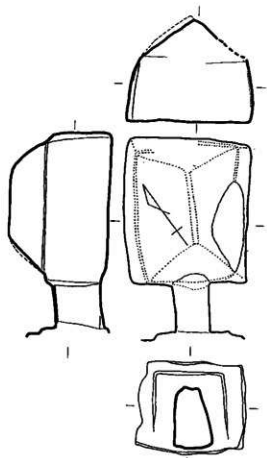
板7号墓



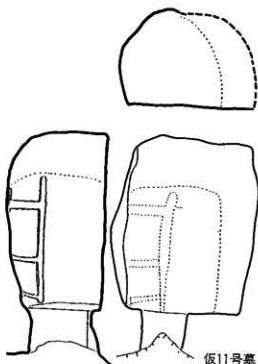
板8号墓



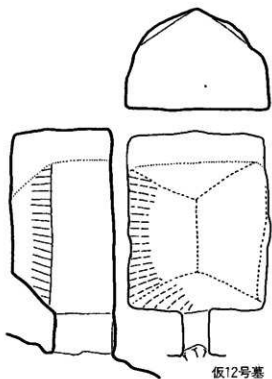
板10号墓



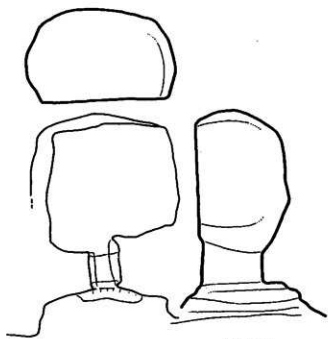
板9号墓



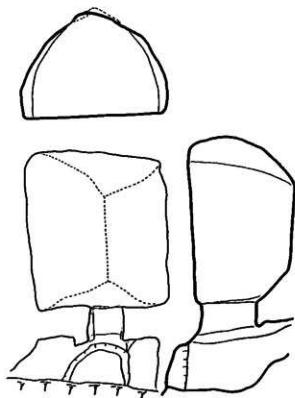
板11号墓



板12号墓



板14号墓

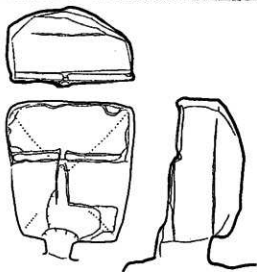


板15号墓

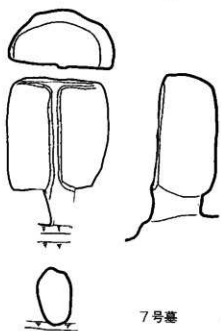
下郡横穴墓群

所在：大分市大字下郡

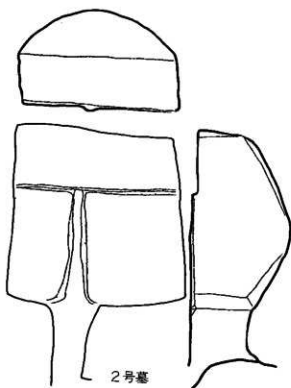
(地名表番号 35)



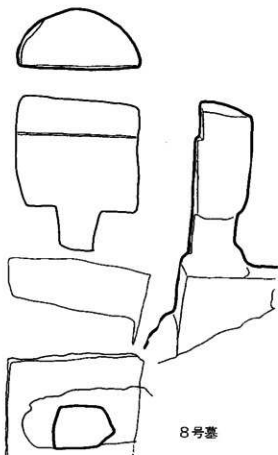
5号墓



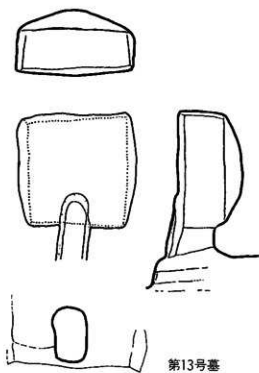
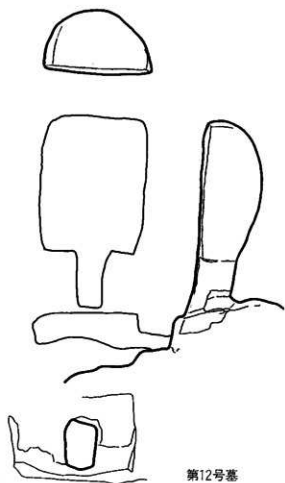
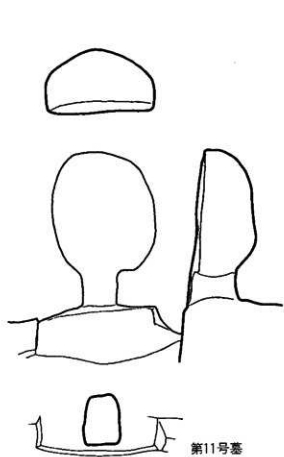
7号墓



2号墓



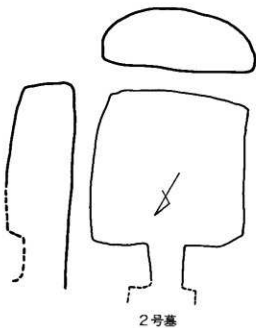
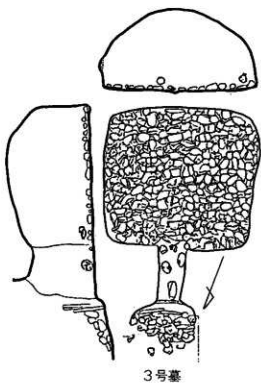
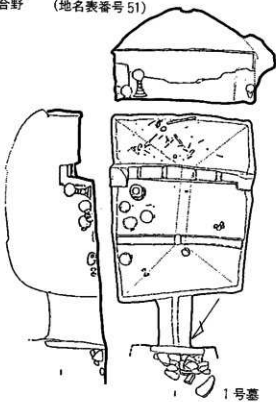
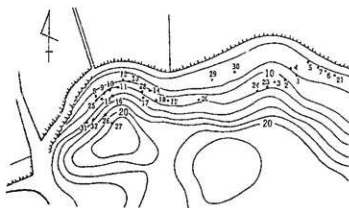
8号墓

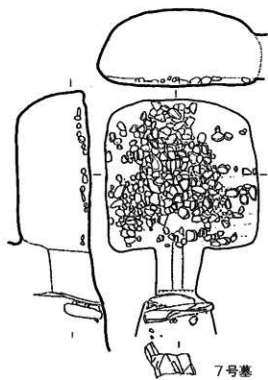
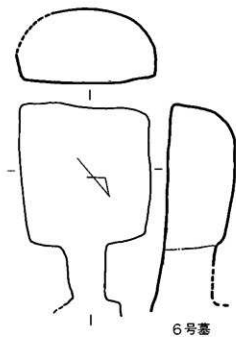
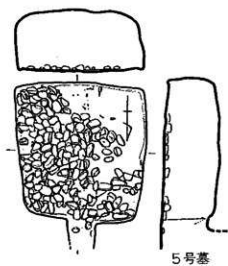
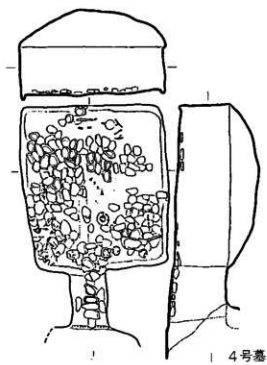


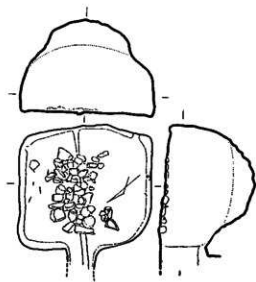
飛山横穴墓群

所在：大分市大字東上野字百合野

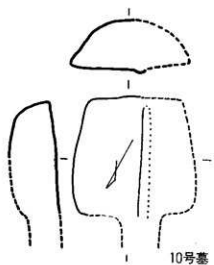
(地名表番号 51)



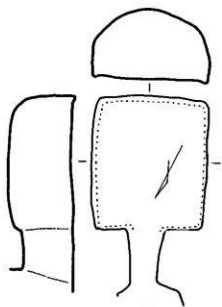




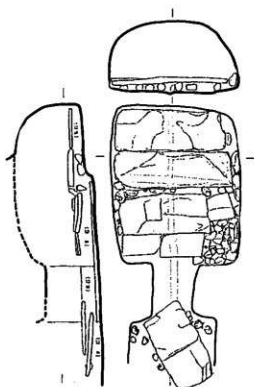
8号墓



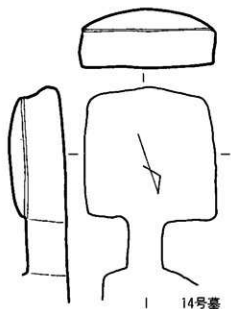
10号墓



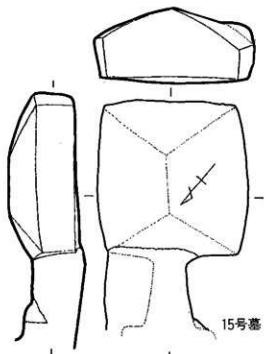
11号墓



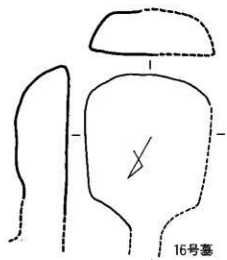
13号墓



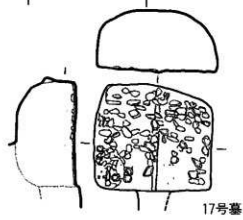
14号墓



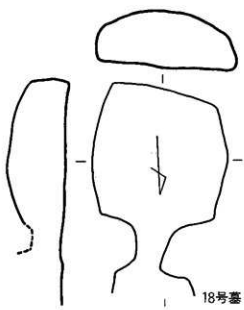
15号墓



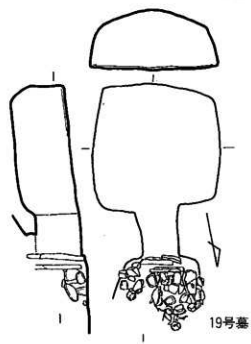
16号墓



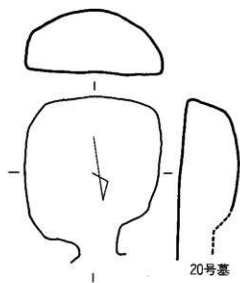
17号墓



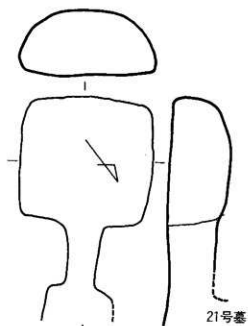
18号墓



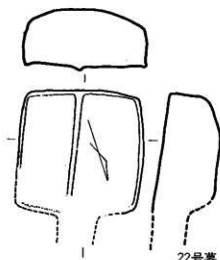
19号墓



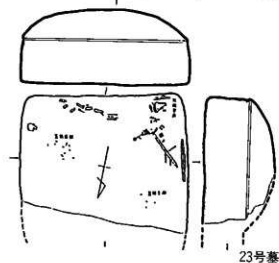
20号基



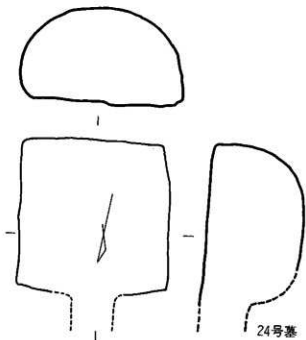
21号基



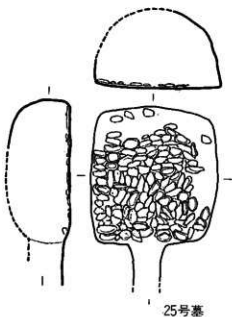
22号基



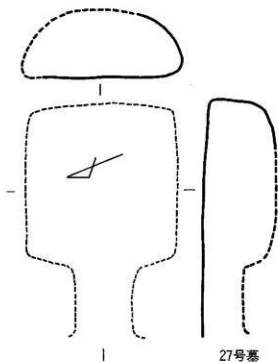
23号基



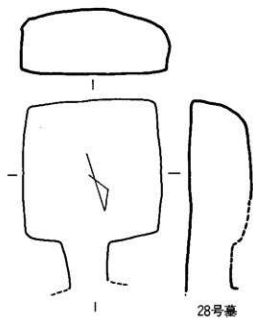
24号基



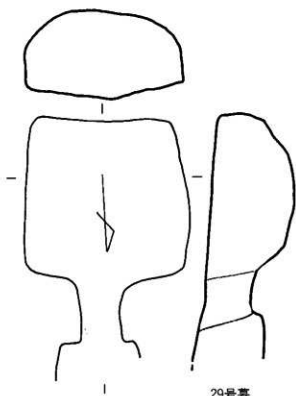
25号基



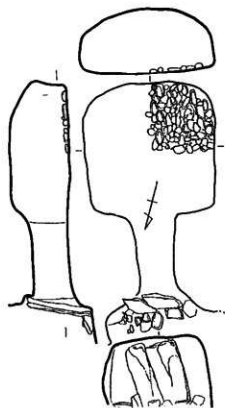
27号墓



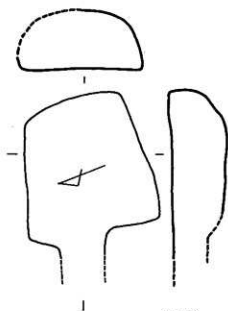
28号墓



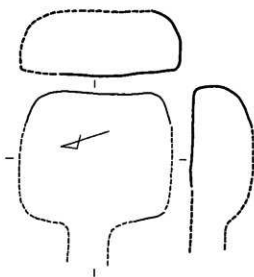
29号墓



30号墓



31号墓

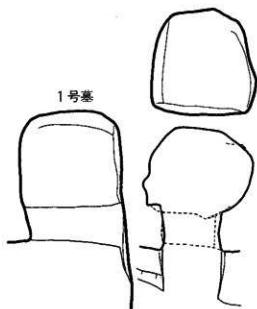


32号墓

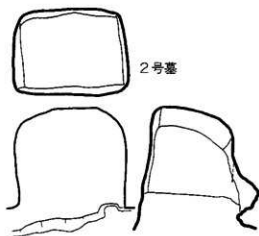
且野原横穴墓群

所在：大分市且野原字叶

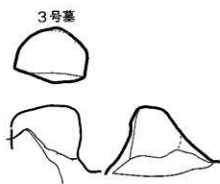
(地名表番号 54)



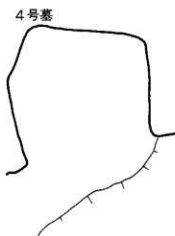
1号墓



2号墓



3号墓

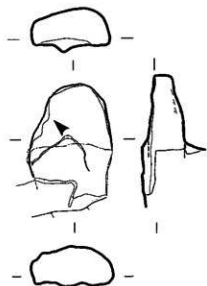


4号墓

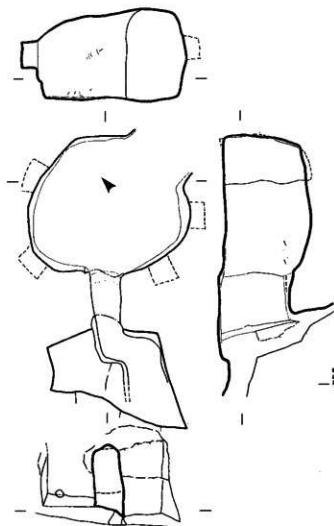
長谷横穴墓群

所在：大分市大字羽田字穴井ヶ迫

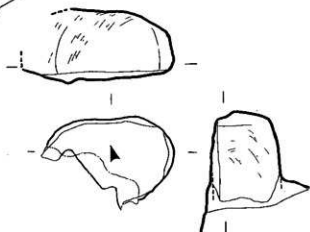
(地名表番号 38)



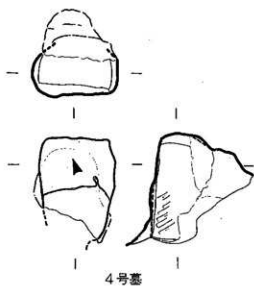
1号墓



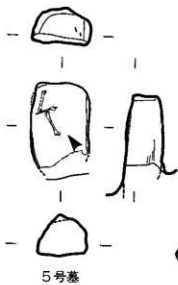
2号墓



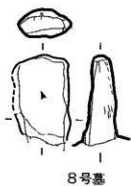
3号墓



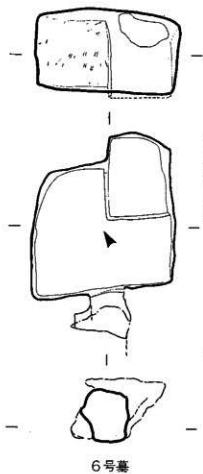
4号墓



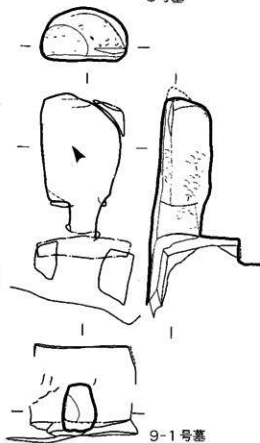
5号墓



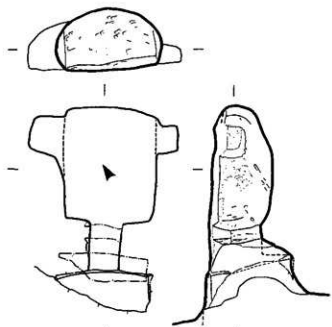
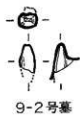
8号墓



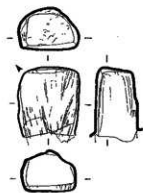
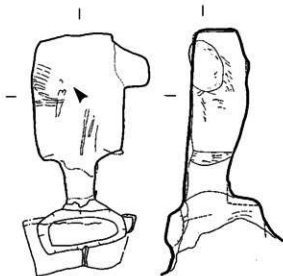
6号墓



9-1号墓



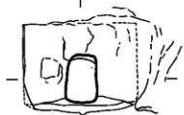
10号墓



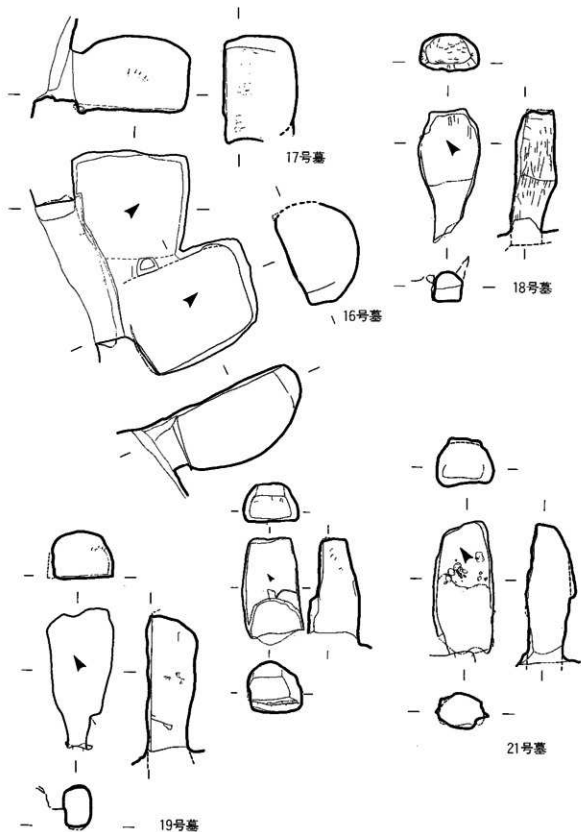
14号墓

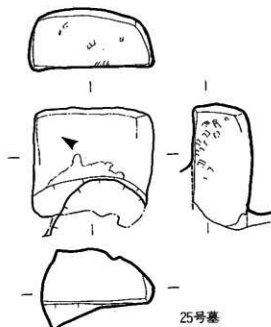
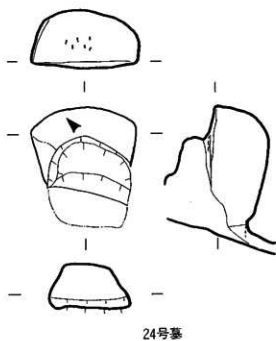
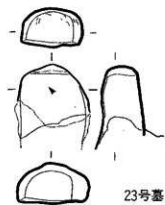
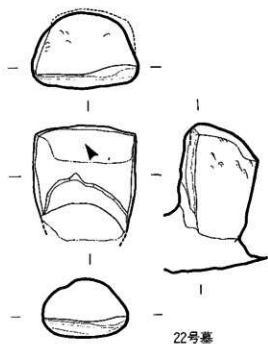


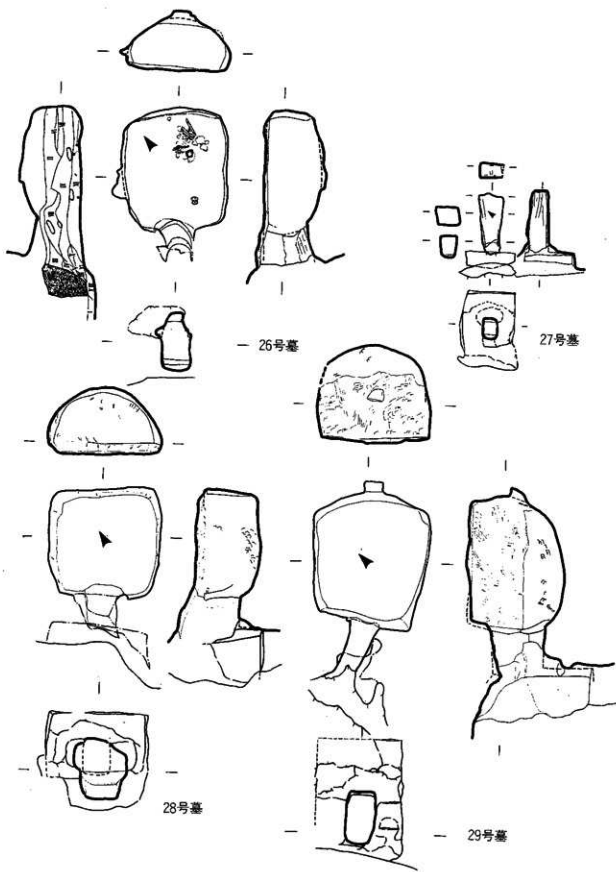
15号墓

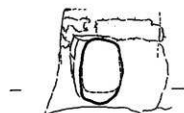
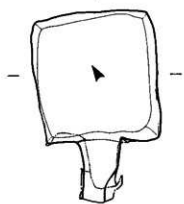


11号墓





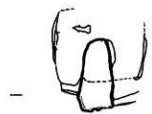
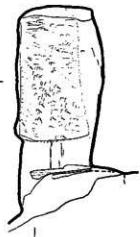
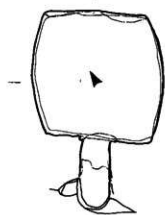




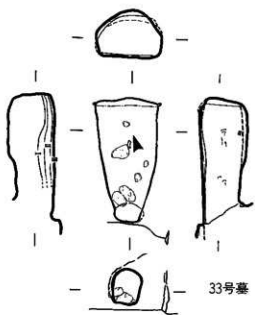
30号基



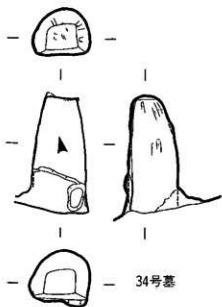
31号基



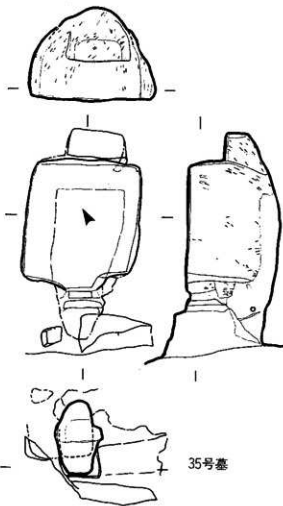
32号基



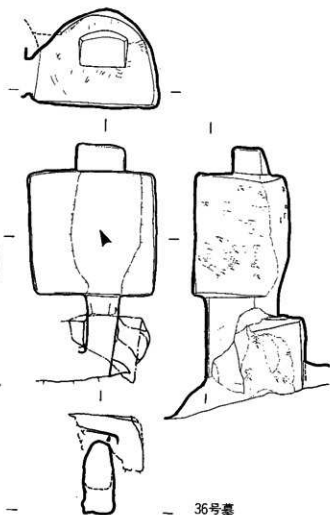
33号墓



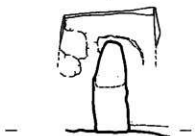
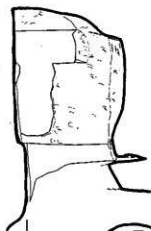
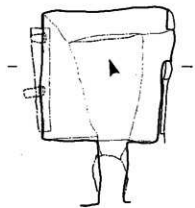
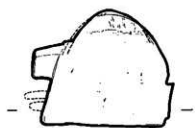
34号墓



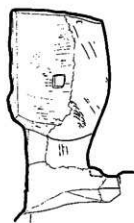
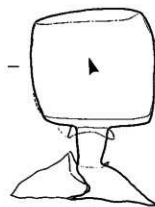
35号墓



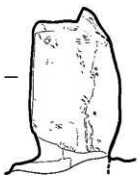
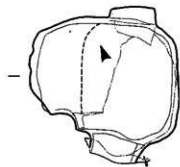
36号墓



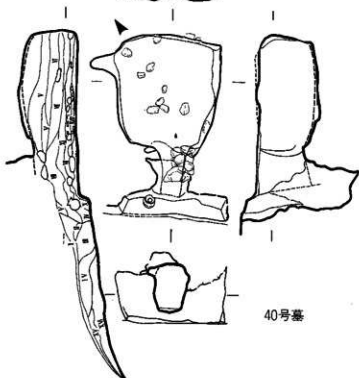
37号墓



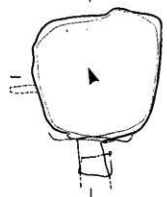
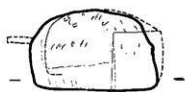
38号墓



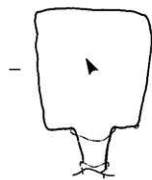
39号墓



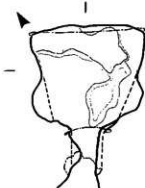
40号墓



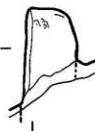
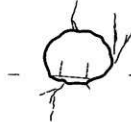
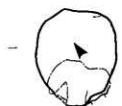
41号基



42号基



43号基

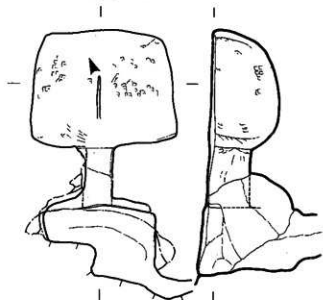


44号基



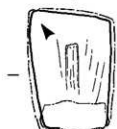
45号基

46号基

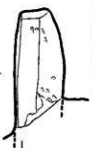


47号基

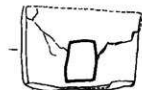
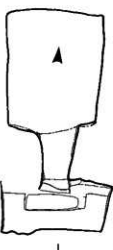




48号塞



49号塞



50号塞

岩崎横穴墓

七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査報告書

平成8年3月31日 印刷

平成8年3月31日 発行

発行 大分県教育委員会

印刷 日の丸印刷株式会社